

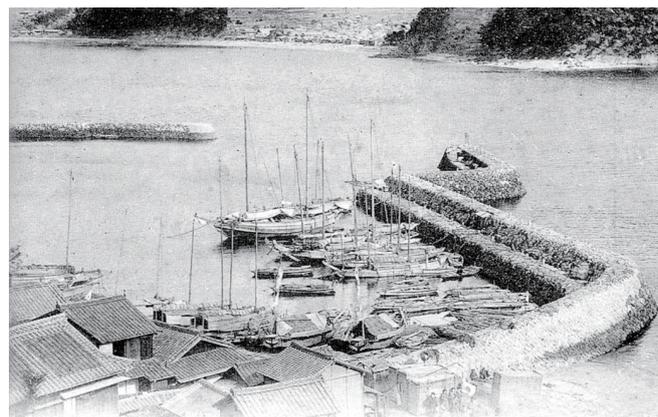
「沖家室の漁村集落」

山口県周防大島町

中世にも人が住んでいたといわれる沖家室島は、天正16年(1588)に豊臣秀吉の海賊禁止令により、一度、無人島になった。その後、慶長11年(1606)に、伊予から河野家の重臣で、興居島(ごごしま)を領有していた石崎勘左衛門の一団が沖家室島に移り住み始め、これが現在の沖家室島の起こりといわれている。当時、沖家室に移住してきたのは、石崎氏以外にも、柳原、金井、林、安本の姓があり、沖家室島の基礎を築いた。以来、瀬戸内海の海上交通の要衝として栄えると

共に、瀬戸内屈指の漁村として繁栄した。江戸時代の参勤交代の折には、島の唯一の寺院の泊清寺が大名の本陣となり、御番所、御舟蔵、高札場が設けられ、藩の役人も常駐していた。

その後、人口は増え続け、0.95平方キロの小さな島は、明治期には3,000人を超え、「かむろ千軒」と言われた。もともと、沖家室島は小さく、耕地や浜にも恵まれなかったため、農業や製塩等には適さなかった。しかし、交通の要衝と好漁場の形成という立地条件が、徐々に発展する瀬戸内海沿岸の城下町や港町への新鮮な魚介類の供給基地としての性格を明確にしていくことになる。このような背景から、漁業が盛んで、塩飽諸島等の東瀬戸内海方面や、下関、対馬、伊万里等の九州方面に船団を組んで出漁し、対馬の浅藻に見られるような枝村を出すに至っている。明治以降には、朝鮮半島や



大正期の沖家室島本浦『かむろ復刻版第2巻』より

台湾、中国(青島)、ハワイ諸島にまで出漁し、移住漁家も輩出した。同時に、国外への商業移住も相次ぎ、多くの移民を輩出した大島郡の中でも、最も移民の多かった島として知られている。

戦後は、高度経済成長の中、島の過疎化が進む。現在は131世帯、189人が暮らし、高齢化率は73%を越えている。

大正期の沖家室島州崎『かむろ復刻版第2巻』より

【参考資料】東和町誌各論編第2巻 集落と住居
沖家室開島400年記念誌「きずな」より、沖家室400年の絆(新山玄雄)
あるくみるさく195「沖家室 瀬戸内海の釣漁の島」(森本孝、須藤護、新山玄雄)

みどころ



- 周防大島文化交流センター：周防大島出身の民俗学者・宮本常一氏の著書や写真を展示。日本全国を歩いて収集した庶民の生活文化資料を閲覧できる。また、作詞家・星野哲郎記念館(平成19年7月開館)が隣接している。
☎ 0820-78-2514
- 鰐(ふか)地蔵：沖家室の漁村集落にある泊清寺というお寺の境内別院に祀られている高さ1尺5寸の木彫りの地蔵尊。昔、海で溺れそうになった娘を鰐(ふか)に身を変えて助けたといわれている。